

## 沿岸沖合域海況調査

(予算区分 国庫補助 研究期間 平成9～ 年度)

担当：資源海洋科 高木康次・吉田 彰

### 【研究の背景とねらい】

計画的な操業を進めるため、沿岸沖合域の海況について調査し、海況変動に応じた漁況予測手法について検討するなど情報の高度化を計り、的確に情報を伝達します。

### 【これまでに得られた成果】

- 平成22年夏季は猛暑の影響を受けて表面水温が平年差2以上となる高水温を数日観測しました。一方、調査船による観測では夏季でも50m以深で低水温を観測し、猛暑の影響は表層に限られていました。
- 平成22年8月に伊豆半島南端では沿岸湧昇による低水温がみられ、この現象による水温低下は駿河湾内を反時計回りに伝播しました。
- 黒潮流型と沿岸水温の関係を長期的にみると、以前はA型>B型>N型>C型の順に高水温の傾向がみられ、平年に比べA型、B型は高め、N型、C型は低めでしたが、1995年以降の近年はA型>B型>C型>N型の順で、平年に比べて全般に高めとなっています。
- ただし同じ流型でも流れる位置により沿岸水温は変化し、N型時に黒潮が小蛇行を伴って接近した場合は平年よりも1以上高めになりました。
- 伊豆諸島北部海域が冷水域となるC型時にはサバ類の漁場形成が暖水の波及の状況と関連していることが確認されました。
- カタクチシラスの春漁について、水揚量と春漁の開始時期が、黒潮離岸距離、定地水温及び親イワシの水揚量を用いた重相関分析で予測できる可能性が示唆されました。
- 調査結果を基に、漁況や海況の速報として1回/月、漁況予測については3回/年発表し、研修会やFAX等を通じて関係漁業者に伝達しました。

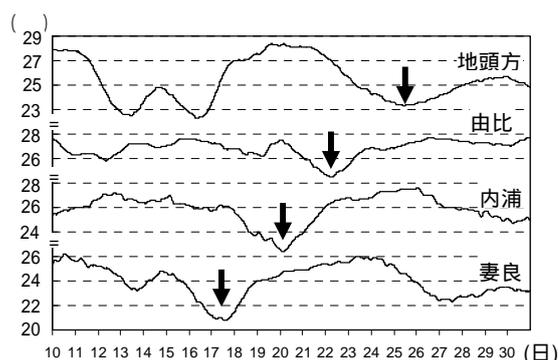


図 駿河湾沿岸5m深における水温変化。  
平成22年8月10～30日、25時間移動平均  
矢印は水温低下のピークを示す。

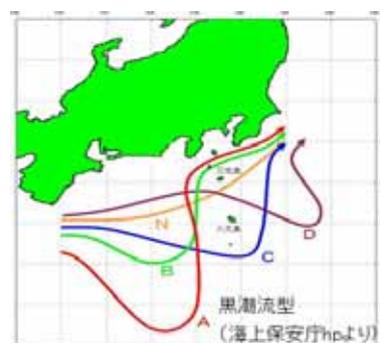


図 黒潮流型区分  
(海上保安庁HPより引用)

### 【期待される成果】

- 沿岸沖合域の調査結果は速報や漁況予測の基礎資料となり、それを活用することにより効率的、経済的な操業が可能となります。
- 継続して海況調査を行うことで温暖化などに関連した環境把握が可能となります。

### 【今後の計画】

静岡県沿岸沖合域の海況調査を継続実施し、海況変動と漁況変動との関係を明らかにするとともに漁海況予測の精度向上を図ります。

(作成 平成23年4月)